

求められる「人の命を守る防災」への回帰

日本災害情報学会理事 片田 敏孝



津波常襲地域を襲った巨大な津波によって、膨大な数の犠牲者を出してしまった。確かに津波は巨大だった。犠牲者ゼロを標榜して地域防災に取り組んできた防災研究者として無念でならないが、あれほどの大津波である以上、ある程度の犠牲者は覚悟せざるを得ない。しかし、日本の防災そして防災研究は、犠牲者を減らすことにおいて最善の努力をしてきたのだろうか。防災という分野が担う最優先課題は、災害犠牲者を減らすことにあるはずだ。もちろん被災地が復興し、生き残った者が立ち直ることに貢献することも防災の重要な使命である。しかし、それであってもまず災害ごときで命を落とす人を無くすことが、防災そして防災研究の最優先課題ではないだろうか。

6,437名もの犠牲者を出した阪神淡路大震災は日本の防災を大きく変えた。人々の心の傷は癒え切れではないものの、16年の歳月を経て、神戸の街に震災の跡を探すことも難しくなった。国費の投入により街の再建が促進され、被災者個人にも被災者生活再建支援法などによって支援の道が開かれた。さらにボランティア元年とも言われるように、被災者の生活復旧を国民みんなで支援する活動も社会に定着が進んだ。被災に打ち拉がれる人々を官民一体となって救う社会へと大きく前進したことにおいて、阪神淡路大震災以後の防災は大きく改善されたと言える。しかし、改善されたのは生き残った人々が、立ち上がるための防災だったのではないだろうか。

もちろんその重要性は言うまでもない。しかし、それであってもやはり防災の最優先課題は、人を自然災害で死なせないことだと思う。東日本の大津波災害では2万数千人の命が奪われた。その一人一人の無念は、声となって我々には届かない。そして、無念の固まりであるご遺体は、一般にほとんど目に触れることなく葬られていく。その一方で、被災者の苦しみや悲しみは、荒れ果てた被災地の光景と共に我々の心を揺さ振る。そして、そこにおいて、その時において、我々が出来る最大限の救いに邁進することで、死者への弔いの心とすり変えてしまう。

被災地の膨大な瓦礫のなか、不明の家族の得られるはずもない僅かな消息を捜して彷徨い歩く人々を見るとき、これ以上残された家族の悲しみを生まないためにも、そして何より死者の無念を繰り返さないためにも、「人の命を守る防災」が最優先であることを再認識せざるを得ない。我々は6,437名の死者の声にもう少し耳を傾けるべきだった。

(群馬大学大学院教授・広域首都圏防災研究センター長)